

## 東行庵

慶応三年四月十四日八つ時（午前二時頃）、晋作は眠るように息を引き取る。

享年二十九歳——、あまりに若すぎる革命児の死であった。

その報せを受けた白石正一郎は、真夜中であるにも関わらず、慌てて林算九郎の家に飛んできた。そして直ちに吉田村の奇兵隊陣所にその訃報を届け、明けて昼には山県狂介や福田佚平が駆け付けて、白石宅で葬儀の相談をはじめた。その場には雅も小忠太もあり、卯乃も給仕をしたいと申し出て、一緒に話を聞いていた。

ところが話の成り行きは、正一郎の提案から神祭で行う方向に進められ、葬儀も酒を用いず、しめやかに執り行うことと決まっていた。小忠太も雅も何も言わずに聞き入れていたが、卯乃はなんだか納得がいかない。ついに思いあまつて、

「旦那はんは、そんなお葬式など望んでおりまへん！」

と涙を溜めて口走ってしまふ。一瞬、しんと静まり返った談議だったが、

「あんたは黙っておれ！」

と小忠太が叫んだ。しかし卯乃はかまわず続けた。

「旦那はんは観音菩薩を敬っておられました。だから神祭はやめておくれやす。それに旦那

はんは賑やかなことが好きでありました。死んだら芸妓はんを大勢呼んで、三味線や太鼓打ち鳴らして、みんなでお酒を飲みながら、楽しく可笑しく盛大に行つて欲しいと申しておりまして。最後くらい旦那はんの願いを叶えてやりたいんや！」

卯乃はわんつと泣き出した。

「お卯乃さん、お気持ちわかりますが、神祭による葬儀は奇兵隊結成以来の習いでございまして、葬儀に芸妓を呼ぶなど、いくら高杉様の望みとはいえ……ねえ」

正一郎は困ったふうにそう言うと、今度はたまたまず小忠太が立ち上がり、「部外者は出て行つてくれ」と、彼女を外に引つ張り出してしまった。「待っておくれやす！」と抵抗したが、次の瞬間、卯乃は晋作の声を聞いた気がした。

「お卯乃、白石殿の言う通りにしちゃれ——」

卯乃は抵抗するのをやめて、「まったくその通りだ」と納得した。生前の晋作の正一郎に対する恩義を思えば、白石正一郎こそ彼の親であり、同志であった。きっと晋作が生きていれば、必ずそう言ったであろうと、卯乃はもう何も言わずに林屋に戻り、晋作の亡骸の脇に座って、湯呑みに注いだ酒を置き、いつまでも三味線を弾き続けるのであった。

この年の十月十四日、大政奉還が実現する。奇しくもこの日は、晋作が死んでちょうど半年経った命日でもある。そして十二月九日の王政復古の大号令とともに、薩摩、長州、土佐などが

中心となった新政府の樹立とともに、新しい時代の幕は切つて落とされた。ちなみに『明治』と元号が改められたのは、慶応四年九月八日に明治天皇が即位した時である。

ところが、その後の情勢といったら、けつして平和裏に物事が進んだわけではなく、新政府軍と旧幕府勢力との間で、激しい戦争が繰り広げられることになる。いわゆる戊辰戦争だ。

慶応四年（一八六八）一月三日、薩摩、長州、土佐藩を中心とした新政府連合軍は、鳥羽・伏見で旧幕府軍と衝突し、その後、北越戦争、江戸城無血開城、上野戦争、会津戦争、函館戦争と新政府軍は東上し、明治二年（一八六九）五月の五稜郭の明け渡しまで、その悲劇は続く。ここに至つて徳川幕府は、名実ともに崩壊したのである。徳川にとつて唯一の救いは、江戸城を無血開城したことで、もしこれが戦火を交える武力攻防になっていたら、当時でさえ世界有数の江戸の町は焦土と化し、一〇〇万以上とも言われる江戸の庶民達は路頭に迷い、数知れない貴重な文化遺産も失うことであつたらう。それを死守した勝海舟という男はやはり凡人にはあらず、彼の提案を受け入れた西郷もまた、しかるべき評価をされているのは当然であらう。

ここで明治初期の主立った出来事を年表にしてみる。

明治二年（一八六九）六月、版籍奉還 諸藩主を知藩事に任命。

十二月、東京、横浜間電信開通。

明治三年（一八七〇）一月、大教宣布の詔（神道国教化推進）

明治四年（一八七二）一月、郵便制度開始。

四月、戸籍法制定。

七月、廃藩置県。初の対等条約となる日清修好条規。

八月、身分解放令布告。

明治五年（一八七二）八月、学制公布。

十二月三日、太陽暦採用（この日が明治六年元旦となる）。

明治六年（一八七三）一月、徴兵令公布。

七月、地租改正条例公布。

十月、征韓論争起こる。

明治七年（一八七四）五月、台湾出兵。

明治九年（一八七六）三月、廢刀令。

なるほど日本の社会制度の劇的な変化と、日進月歩の文明の進歩が見受けられるが、同時に海外への侵略思想がちらほらと見受けられる。更には征韓論の議論のもつれや廢刀令などが引き金となり、明治十年（一八七七）には西南戦争が勃発する。これは西郷隆盛がいる鹿児島を端にして起つた土族と新政府軍との戦争である。更に日本はその後、日清戦争（明治二十七年、二十八年）、日露戦争（明治三十七、三十八年）、日中戦争（昭和十二、二十年）、太平洋戦争（昭

和十六（二十年）と、泥沼のような悲劇を繰り返し続けるのである。人類の機根とはいえ、悲しすぎる歴史である。

もし、晋作が生きていれば——と思うことがある。

きつと彼は、国内のいざこざに手を染めることを嫌って、今度こそ、

「エゲレスに行っちゃる」

と、海外へ留学をしていたらと思うのは筆者だけではないはずだ。大政奉還された時点で晋作の倒幕の夢は達成され、その後は松陰の果たせなかつた夢をひとつでも実現しようと尽力するだろうと思うのだ。

「お卯乃、一緒に参るか？」

「へえ」

と、卯乃は日本における女性海外留学の第一人者にもなっていたらどうか。まあ、彼女の資質からそれはあり得ないだろう。

では帰国後はどうか？と問われれば、先の年表でも分かるように、様々な分野で様々な変革が起こっており、松陰門下の生き残った者達でさえ、その目指すところははっきりとしない。どこのつまりは晋作もどうなつたか分からないというのが本音である。結局日本は、富国強兵の道を辿るしかなく、その意味では松陰の思想は尊皇倒幕を実現した時点で、行き先を失つたようにも見える。しかし草莽崛起の本意が民衆主体の国家形成であるならば、松陰の夢は、けつして戦

争によって民衆が苦しむことではないはずだ。

晋作が亡くなって間もなく、卯乃は谷梅処と名前を改めた。実は晋作が亡くなる直前の三月二十九日、彼は藩より新知一〇〇石が与えられ、谷家を創設して谷潜蔵を名乗った。谷という姓は、彼が潜伏する際にたびたび用いていた谷潜蔵や谷梅之助にも由来したもので、晋作から、「ボクが死んだら谷姓を名乗るがよい。名は、そうじゃのう……、梅にまつわるのがよい……、梅の咲く処、梅処がよからう」

と、遺言されたことなのだ。

さて次に、谷梅処は、いつから山県狂介の無隣庵に住むことになったのだろうか。

登記の記載によれば、明治七年に吉田村の山県の所有地と新しく買い取った隣接地が、彼女に贈与されたという記録があるらしい。この線から考えると、次の説が信憑性を増してくる。フィクションを交えて紹介する。

晋作没後の七月十六日に、山県狂介は下関の石川良平の娘友子と結婚した。住まいは晋作の墓の在する奇兵隊屯所のあつた吉田村の無隣庵で、その後彼は、戊辰戦争には奇兵隊と共に北越戦争と会津戦争に、総督あるいは参謀として戦つた。そして維新を境に有朋と名乗るようになった山県は、更に明治二年五月には、各国の軍事制度を視察するためヨーロッパに渡り、翌年十月アメリカを経由して帰国する。後の日本における軍制改革を断行していくわけだが、日本における徴兵制度を取り入れたのも実は彼の業績である。しかしこれには、

「制度という形など作っても無意味じゃ。志が先じゃー！」  
という晋作の声が聞こえてきそうだ。それはともかく、渡欧の前後には白石正一郎宅において  
歓送迎会が行われており、下関との縁も深い男であった。

明治五年、新政府日本の動揺した民心を安定させるため、明治天皇は西国巡行を行った。そ  
して六月には下関にも立ち寄り、そこに随行していた山県は、少しの時間を見つけて桜山の招魂  
場にお参りに行った。すると、そこで黙々と掃除をしていたのがお卯乃こと谷梅処であった。

「お卯乃さん、何をしているのですか？」

卯乃は聞き覚えのある声に驚いて、

「何って、お墓の掃除や……。旦那はんに頼まれましたさかい。先生とお友達のもきれいにし  
とかと、わて、旦那はんに怒られますのん」

と山県に答えた。

「だってここには高杉さんの遺骨はありませんよ。吉田の方へは……？」

「行こう行こう思ってますのやけど、遠いし、向こうに住む所もございせんやろ？ここで墓  
守りするしか仕方おまへん」

その健気な姿に山県は涙を流した。考えてみればその頃の山県の生活の場所は中央の方である  
し、吉田の無隣庵にはもうあまり用はない。そこで、

「わしの換わりに無隣庵を使っただけませんか？その方が高杉さんも喜ぶでしょう」

と、吉田で眠る晋作の墓守りをお願いできないかと提案した。

「ほんま？よろしおすの？」

卯乃は花が咲くように笑った。

「ほな、わて、頭丸めて旦那さんになりますわー！」

その呼吸するような自然な言葉には、何の思慮も下心もない。ただ晋作を愛する思いだけが、  
寶石のように光っていた。卯乃にしてみれば、維新の扉を開くという途方もない大きな仕事を成  
し遂げた晋作から言い付けられた事を護ることのみが全てであり、これから生きる世界であつた  
に違いない。

一説には、生活に困った卯乃が、巷で三味線を弾いてあぶく銭を稼いでいる惨めな姿を目撃し  
て、伊藤俊輔や山県有朋が相談し、「貞操観念の薄い彼女が、後々浮名を流すことがあれば晋作  
の名前に傷がつく」と考え強引に出家させ、有朋の無隣庵を贈ったというようなものもあるが、  
晋作に従っていた彼らが、男尊女卑の時代であつたにせよ、果たして尊敬に値する先輩の女性に、  
そんな無粋な事ができただろうか？やはり出家にせよ無隣庵への転居にせよ、彼女が望んだこと  
と見る方が美しい。

いや、そうではなく、谷梅処が無隣庵に移り住んだのは、晋作が埋葬されて一周忌を迎えて  
からであるとする見方も実はできる。ちょうどその頃山県は、戊辰戦争で無隣庵を留守にしてい  
るはずであるし、留守中、梅処に家の事を頼んだと考えても矛盾はない。その線の根拠になるの

が四国の日柳燕石の存在で、どちらかというところの方がドラマチックなので、この小説ではこちらの方をとりとうと思う。

日柳燕石といえは慶応元年、晋作がお卯乃を伴つて逃げた先の、四国は琴平のやくざ者の親分である。困つてもらつた上に、晋作と卯乃が四国を脱する際、犠牲となつて牢に繋がれた勤王詩人でもある。

彼が出獄したのが慶応四年一月のこと。この時すでに晋作はいない。

その彼が吉田村の晋作の墓参に来たのが慶応四年の五月九日のことで、谷梅処が無隣庵に住むようになってすぐの事だつたと言ふ。庵の戸を開けた外に、その懐かしい顔があつた。燕石五十二歳の菖蒲が咲くには少し早い季節である。

「どうか高杉様に、お線香をあげさせて下さう」

「これは、まあ！いつぞやの！」

梅処は燕石を庵に招き入れようと「さあどうぞ」と手招きした。

「いいえ、それには及びません。どうかお墓参りをさせて下さう」

そうして梅処は彼を晋作の墓前に案内した。

と――、

突然、滂沱の涙をポロポロこぼし、周囲をはばかりることなく燕石は「うをうっ！」と泣き出した。「獄中での私の望みはたったひとつ、高杉様との再会を果たすことでした！あまりにお若い死

ではありませんか！できることなら、この老いぼれが換わつてあげたかった！」

梅処は燕石の肩を抱いて慰めた。

「旦那はんは、私達を匿つた罪で投獄された燕石様のことを、『燕石さんには申し訳ないことをした』と、亡くなる間際までずっと気にしておりました。でもこうして牢を出られたことを知つて、さぞかし安心し、喜んでおられるに違いありません」

と梅処は耳元で優しく告げた。その言葉を聞いた燕石は、更に大きな声で号泣した。

故人為鬼美人尼（故人鬼となり、美人尼となる）

浮世変遷眞可悲（浮世の変遷、眞に悲しむべし）

惨日凄風吉田駅（惨日凄風の吉田駅）

涙痕如雨灑苔碑（涙痕雨の如く苔碑に灑ぐ）

この後燕石は、梅処尼に対しても彼女を称えた詩を残す。

憐汝恩情会不忘（憐れむ汝の恩情会つて忘れざるを）

雲鬢剃去守空房（雲鬢剃り去つて空房を守る）

鴛鴦衾外春風冷（鴛鴦の衾の外春風冷やかに）

燕子楼中秋夜長（燕子楼中秋夜長し）  
 誰道妓娼無信義（誰か道う妓娼に信義無しと）  
 始知婦女有心腸（始めて知る婦女に心腸有りと）  
 高郎地下応眼目（高郎地下応に眼目すべし）  
 織手長供一片香（織手長く供す一片の香）

雲鬢とは美しい髪のこと、鴛鴦とはオシドリ、鴛鴦の衾とは夫婦が一緒に寝る夜具のこと、燕子楼とは唐の張建封が死んだ後、その愛妾が空き部屋を守って暮らした家の事である。この部分、白居易の「燕子楼中」という詩を引用して、そこに燕子楼自身の香象楼を重ねているようだ。高郎とは晋作を指し、織手とは細くしなやかな梅処の腕のことである。

しかし燕子にして「誰かいう妓娼信義なしと、初めて知る婦女心腸あるを」とはどういうことか？確かに四国に渡った時の卯乃は、晋作と一緒にバカ騒ぎをする妓娼と見えても仕方がなかったかも知れないが、これが両手では足りないほどの妾を持っていた男の口から出るとは、よほど女性に恵まれていなかったか、女性蔑視の心が甚だしかったかのどちらかであろうか。いずれにせよ、妓娼と詠んだ梅処を婦女と言ひ換えて、しかもそこに眩しいほどの美しい心を見た感動を抑えられなかったのであろう。無心で晋作の墓守りをする梅処尼を通して、初めて女性の美しさを知るのである。

最後に野村望東尼のその後を記しておく必要があるだろう。

晋作亡き後、彼女は晋作恩顧の人達の好意に支えられ、福岡藩の藩論を倒幕に覆し、未だ囚中の勤王志士達が開放されることを願って、彼らに援助を請うなどの周旋活動をしたという。その後、知人を頼って長府、湯田、山口へと居を移すことになる。

初夏の頃移った先は、山口の小田村伊之助の家であった。伊之助の妻寿子は、吉田松陰の妹に当たる人物であるが、松陰の妹といえは久坂玄瑞の妻もそうである。玄瑞の妻は文子といって、松陰には二人の妹がいた。伊之助は後に男爵となるが、寿子が亡くなった後、文子と再婚している。つまり彼は、松陰の二人の妹と結婚したことになり、それほど松陰との縁も深い家であった。おそらく長州に縁も所縁もない福岡の一人の女が、山口の松陰所縁の家に身を移すことができたのも、生前晋作が根回しをしていたからのようにも思われる。

この頃まだ大政奉還は成っていない。九月十九日、長州と薩摩、安芸藩との間に倒幕の盟約が成立し、その連合軍が三田尻（現防府市）から海路東上することを知った望東尼は、矢も楯もたまず同月二十五日に、一人歩いて三田尻へ向かった。このあたりは勤王の志に突き動かされた女流詩人の信念を見る思いである。晋作の遺子を継ぎ、なんとしても倒幕を実現させたいと願う異常なまでの心意気である。

しかしこの頃、彼女の老いた身体には、病の魔の手が忍び寄っていた。晋作と同じ労咳である。

およそ彼の病気がうつったものか、しかし病に對する落胆など微塵もない。それどころか来世で夫婦になると約束した最愛の男と同じ病氣であることは、彼女に飲びさえ与えていた。

三田尻では歌友の荒瀬ゆり子宅に身を寄せた望東尼は、倒幕軍の戦勝祈願のため七日間に渡つて防府天満宮に参籠する。天満宮とは勤王家にとっては自然に見えるが、実は晋作の影響もあつたかも知れない。ところが皮肉にも晋作の方は、望東尼から授かつた観音経の影響か、現在ある東行庵には観音像が立っているのである。

戦勝祈願のため彼女は断食を断行し、毎日一首の和歌を神前に奉納する。高齢に加え病身でのこの行為はあまりに無謀で過酷なものであつたと言わざるを得ない。むしろ死に急いでいるように見える。

この三田尻滞在中、彼女の詠んだ和歌で、晋作の面影が感じられるものを挙げてみたい。

君がため身を腐してぞ朽ちやらぬいはは(庵)にきよき名はとどめける  
ものふの君にささげししかばね(屍)の朽ちぞくちぬ名をしるしいし

これは十月三日、防府宮市の豪商山内正蔵を訪ねた折り、山田市之允と桑野山の勤王家志士達の墓に詣でた時に詠じたものである。

たむけする山路の菊に梅のはなそへし心のかをりするかな  
ひとむらのその木のかげに風避きて春のこの日をにる冬野かな

この歌は十月二十五日、病床にある中で作した。『菊』は言うまでもなく天皇のことで、『梅』あるいは『春』『風』という言葉の中には、晋作への思いが込められているに違いないのだ。晋作の諱は『春風』であるからだ。

そして――、

冬ごもりこらゑこらゑて一時に花咲きみてる春は来るらし

である。これは十一月六日、藩医の竹田祐伯が山口へ帰る際手向けた歌である。きっと晋作の診察もしていた医者でもあろう。望東尼は晋作と自分が長い冬を耐えて、あの世で春を迎えようとしていることを、世話になった医者の方に伝えたかったのかも知れない。

こうして慶応三年十一月六日夜、晋作よりわずか七ヶ月ばかり遅れて、彼女は晋作の後を追うように、六十二歳の生涯を閉じた。

さて、その後の梅処尼の生活はといえば、井上馨(聞多)、木戸孝允、伊藤博文(俊輔)、山県

有朋、山田顯義、その他生前晋作と縁の深かった者達の経済的援助により支えられていく。更に、伊藤博文と山県有朋の両夫人も、ときおり梅処尼に手紙を宛てては、病氣見舞いや旅行の誘いなど、その暮らし振りをずつと見守っていく。

そして梅処尼は、近所の娘達を庵に招いては、昔覚えた踊りや三味線を教えて、ひっそりとゆるやかな時間を過ごした。

いつしかそこは、『東行庵』と呼ばれるようになる。

(完)